別紙様式３（修士申請者用）

（西暦）2021 年度　博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること）

「自宅退院する 60 代回復期リハビリテーション病棟入院患者の価値ある作業の認識過程
—複線径路等至性アプローチの分析から—」

学位の種類：　修士（作業療法学）
東京都立大学大学院
人間健康科学研究科　博士前期課程 人間健康科学専攻　作業療法科学域
学修番号 20896706
氏　名：中島　彩
（指導教員名：谷村　厚子　准教授）

はじめに

回復期リハビリテーション病棟（以下，回復期リハ病棟）において，作業療法士は対象者の心身機能の回復だけではなく，生活行為の改善に対するアプローチを行うことが期待されている．生活行為の改善には，作業に焦点を当てた実践を行うことが提言されている．先行研究からは，作業に焦点を当てた実践には，価値や意味のある作業に取り組むことの重要性が示唆されている．一方で，回復期リハ病棟入院中の患者が価値ある作業をどのように認識していくのか，その過程については，詳細に検討されていない．

そこで，本研究の目的を，回復期リハ病棟入院中の患者の価値ある作業に対する認識の過程を明らかにし，作業療法士が作業に焦点を当てた実践をするための手がかりを探索することとした．

方法

本研究は，インタビューにてデータ収集を行い，複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach：以下，TEA）を用いて分析を行う質的研究である．対象者は，価値ある作業について話すことができる自宅退院予定の回復期リハ病棟入院患者とした．インタビューは，退院日が決まってから 2 回実施した．加えて，インタビュー内容を照合するために，作業遂行歴面接第 2 版の作業同一性尺度の評価を実施した．

結果

対象者は，男性 3 名，女性 1 名の計 4 名であった．4 名には，病前まで価値ある作業に従事しており，退院時はセルフケア自立レベルに到達し，自宅退院した 60 代という共通点があった．また，TEA の分析から，対象者は入院中に価値ある作業に触れることで自分らしくあろうとし，価値ある作業をどんな形でもしたいと思うようになり，「生きる糧となる価値ある作業」という信念が強化されていた．さらに本研究では，【価値ある作業をセラピストに話すことができる】という等至点と，【価値ある作業ができると確信を得る】というセカンド等至点が明らかとなった．

考察

本研究から，対象者は作業同一性を求めて価値ある作業の一部に触れ，【セラピストに価値ある作業について話すことができる】という経験をしていた．さらに，障害があっても価値ある作業ができるという情報の取り込みによって，どんな形でもしたいと思うようになり，価値ある作業の認識を変化させていた．そして，価値ある作業の模擬的な訓練によって，【価値ある作業ができると確信を得る】過程を経ていた．その過程は，「生きる糧となる価値ある作業」の信念を強化させていたことが明らかとなった．

以上より，作業療法士は，早期から価値ある作業に対する支援を行い，環境や方法の工夫によって価値ある作業ができるという情報と，価値ある作業の実践的または模擬的な訓練の機会を提供することが，対象者の有効感を高めるような作業に焦点を当てた実践を可能にすると考える．